

古記録文化の形成と展開

——平安貴族の日記に見る具注曆記・別記の書き分けと統合——

三橋 正

はじめに

平安時代中期は、政治史では摂関期、文化史ではいわゆる「国風文化」の時代とされる。天皇との外戚関係を維持した藤原北家による政治体制は、天皇の後妃となる女性の地位と教養を高め、仮名による文学や和様の芸術を展開させた。この見方は誤りではないが、一面しか捉えていないことも事実である。政治・社会・文化のいずれを見ても、女性や仮名が中心に位置していたわけではなく、あくまで天皇を支える太政官機構が政務・儀式を取り仕切り、男性の貴族による漢文を用いた行政・書類管理と中国を指向した文化的営為が確たる基盤として存在していた。むしろ、その基盤がしっかりしていたからこそ、周縁で和様化を進めることができたのである。

ところが、その漢文を中心とする社会のあり方を、文化として総合的に把握しようという試みは少ない。これまで文化研究の対象としては漢詩や願文など比較的に中国の漢文（純漢文）に近い文学作品が取り上げられてきたが、量的には官僚の実務的な漢文が圧倒的であった。奈良時代以来の律令格式制定や修史事業が礎となり、平安時代前期に政務・儀礼の実践と並行して公的儀式書（『内裏式』『内裏儀式』『儀式』など）が編纂され、その実践を徹底していく中で、天皇を含む政権（朝廷）の責任者が義務的な意識を持って日記を付けるようになった。日記には儀式の作法や業務の細かなやりとりまでも記されたので、ここに日本の言葉のすべてを漢文で表現することが可能になったといえるほど、文化的な影響は大きかった。

平安時代中期（摂関期）以降、先例（前例）を重視する傾向が強くなる中で、公的・私的な日記（古記録）が膨大に残されることに

なったが、私日記でも「公」的な意味を持っていたため、「家」を超えて借用・活用されて多くの写本が製作された。日記の活用は部類記や儀式書を生み出し、他の階層にも広がって神社・寺院の諸資料の作成に発展するなど、日本社会全体の知の体系を形作った。すなわち、日記を付ける習慣と過去の日記を伝承・利用する「古記録文化」は日本的な文化の根底となったのであり、その歴史的意義が解明されなければならない。

ところが、これまでの研究では個々の日記の分析や「家」という単位での捉え方が中心で、社会全体の理念としての「古記録文化」を歴史的に位置付けようとする試みは少なく、日記を付ける習慣を身に付けるまでの過程が明らかになっていなかったと思われる。そこで本稿では、まとまって残されている最も古い私日記である藤原忠平の『貞信公記』を中心に十世紀の日記の存在形態を再検証し、「古記録文化」が確立されていく過程と、その後の展開を考察する。特に、日記の付け方についての復元を試みる。その際、従来の研究に見られたような、日記はまず具注暦に書かれるものとの先入観にとられず、その具注暦記と並行して書かれていた別記の存在にも焦点をあてる。

また、部類記の成立を論じる場合でも、原日記を想定して、そこから編纂されるものという認識が一般的であるが、これについても別記との関係から見直していく。そのために自筆本が伝わらない日

記の書写形態に注目し、これまでは「広本」と「略本」の違いとしてしか認識されていなかった諸写本を、具注暦記と別記、そして両者を統合した作業の結果という観点から見直す。これによって、日記の原形を見えにくくしていた先入観が取り除かれ、現存する『貞信公記抄』『九暦抄』などの日記名に付けられた「抄」を「省略」と同義とする見解や、『親信卿記』『権記』などの不可解な存在形態への疑問を解決する糸口を提供することになる。⁽²⁾

日記（古記録）史料が歴史研究に不可欠であることは言うまでもないが、その中身を読むだけでは不十分で、各日記の構成を見極め、それらの成立（毎日の日記の付け方）と伝来過程での変容を明らかにし、社会的な位置付けや情報発信の方向性を理解しなければならぬ。そのためにも、「古記録文化」の確立・展開という視点からの検証が必要なのである。

一 私日記の淵源——公日記から私日記へ

奈良時代以前の日記として、『日本書紀』に引用される「伊吉博徳言」（白雉五年二月条）、「難波吉士男人書」（斉明天皇五年七月戊寅条）などの在唐日記、『釈日本紀』（卷十五）に「安斗智徳等日記」「調連淡海・安斗宿禰智徳日記」とある壬申の乱の記録、『正倉院文書』天平十八年二月・三月の具注暦への書き入れなどがあるとされ

るが、いずれも日次記ではなく断片的なもので、日記を習慣的に付けて活用するという「古記録文化」の形成には程遠かったことがわかる。また、平安時代前期の円仁『入唐求法巡礼行記』や円珍『行歴抄』は報告書としての性格が強く、国家事業としての遣外使節（遣唐使・遣新羅使・遣渤海使）が業務記録として付けていた日記の系譜に位置付けられる。^③

それに対して、貴族社会で展開する私日記の源流は、宮廷や官衙で職務として記録されていた公日記にあるとされている。『内記日記』は、「職員令」（中務省）に「造詔勅、凡御所記録事、」という規定に基づき天皇の動静を記したとされる。しかし、公日記が本格化するのには平安時代に入ってからで、太政官の外記が職務として記録した『外記日記』の規定が弘仁六年（八一五）正月廿三日の宣旨（『類聚符宣抄』第六・外記職掌）で定められ、同時代に設置された蔵人所でも、六位蔵人が当番を組んで『殿上日記』を記すようになった。他に『近衛陣日記』『検非違使庁日記』などが知られる。^④このような各官衙での公日記の盛行は、弘仁年間（八一〇～八二四）以降に格式や儀式書の編纂が本格化したことと無関係ではない。

いずれも逸文しか残らないが、特に注目しておきたいのは『外記日記』である。『外記日記』は史書の編纂に用いられたことでも知られるが、その逸文に「大祓別記」「年々行幸日記」「釈奠日記」「定考別日記」などと明記されていることから、それぞれの儀式に

ついて別記が存在していたとされている。^⑤『真信公記抄』における『外記日記』の参照の仕方を見ても、天慶八年（九四五）七月一日条に「延喜年中祈雨外記日記」とあるほか、釈奠（承平二年八月八日条に外記矢田部公望との釈奠に関するやりとりで「是日記文也、」とある）・伊勢斎王群行（天慶元年九月十五日条に「自余事外史記之、」とある）・追儼（『西宮記』前田家本・巻七「外記政」所引の承平五年十二月廿九日条逸文に「尋見外記々説、」とある）・相撲（『西宮記』前田家大永鈔本・恒例第二「相撲式」所引の同六年七月廿八日条逸文に「是外記日記也、」とある）という、儀式に関連する先例を検証する際に限られている。^⑥詳細は不明だが、『外記日記』は部類的に記録・保存・活用されていたと想像されるのであり、その形態が私日記へ与えた影響を考慮しなければならないだろう。

宮廷や官衙で定着した日記を付ける習慣が次第に個人のレベルへと移行したことは容易に想像され、その転換点に『宇多天皇御記』が位置付けられる。六国史の最後である『日本三代実録』にある光孝天皇の歴史で官撰国史は終わり、その次の天皇から日記が遺されているのである。もちろん以前にも私日記が存在しなかったわけではないが、宇多天皇（八六七～九三二）は臣籍に降下してから即位した初めての天皇で、元服後に侍従（王侍従と称される）となつて陽成天皇に仕え、元慶八年（八八四）には源朝臣を賜わっていた。その宇多天皇が即位（『扶桑略記』仁和三年十一月十七日条所引逸文）

や直後の阿衡事件（『政事要略』三十・年中行事「阿衡事」所引逸文）について詳しい日記を残していることは、官人として仕えていた時代に体得した日記を付ける習慣が、天皇になっても継承されて『御記（宸記）』を生んだことを示唆している。

けれども、『宇多天皇御記』の記事は諸書に引用された逸文しかなく、記載形式を復元できない。内容を見ても回想録的な「三宝帰依」（『扶桑略記』寛平元年正月条所引逸文）、「愛猫」（『河海抄』若菜下所引、同年十二月六日条逸文）などの記事が多く、儀式を記した賀茂臨時祭関係の記事でもその傾向が認められる（『大鏡』裏書など所引、同年十月廿四日、十一月十二日・十九日・廿一日条逸文⁸）。日記としての形態を復元することはできず、毎日の習慣として記していたのかも不明である。

とはいえ、宇多天皇が日記を付けていたことの歴史的意義は重大で、子の醍醐天皇、孫の村上天皇にも受け継がれ、それらは『三代御記』と総称されるようになった。この頃から摂関政治を主導した藤原氏ら公卿の日記も多くなるが、その基盤には、職務として公日記を付ける習慣があったことに加え、天皇の御記が範とされた可能性が考えられる。

二 『九条殿遺誠』——日記の付け方

日記の付け方については、藤原師輔（九〇八～九六〇）の『九条殿遺誠』に記されている。よく知られた史料であるが、その内容は十分に斟酌されていなかったと思われる。本書は内題の具名を『遺誠并日中行事』としているように、⁹「遺誠」と「日中行事」が統合されているが、内容と形式から、冒頭に「日中行事」の記事があり、¹⁰次いで「凡」で始まる七つの条文からなる「遺誠」へと続いていることがわかる。この中で日記の付け方に関する記述として、まず「日中行事」の最初に、

先起称^{（字）}属星名号^{（字）}七遍、^{（微音、其七星、食銀者子年、巨門者丑亥年、禄存者寅戌年、文曲者卯酉年、廉貞者辰申年、武曲者巳未年、破軍者午年）}次取^{（ナ）}鏡見^{（ナ）}面、次見^{（ナ）}曆知^{（ナ）}日吉凶、次取^{（ナ）}楊枝^{（ナ）}向西洗^{（ナ）}手、次誦^{（ナ）}仏名^{（ナ）}及可^{（ナ）}念^{（ナ）}尋常所^{（ナ）}尊重^{（ナ）}神社、次記^{（ナ）}昨日事、^{（事多日、日中可記之）}

とあり、「遺誠」第一条（最初の条文）の末に、¹¹

次見^{（ナ）}曆書^{（ナ）}可^{（ナ）}知^{（ナ）}日之吉凶、年中行事略注^{（ナ）}付件曆、毎日視^{（ナ）}之、次先知^{（ナ）}其事^{（ナ）}兼以用意、又昨日公事若私不^{（ナ）}得^{（ナ）}心事等、為^{（ナ）}備^{（ナ）}忽忘、又聊可^{（ナ）}注^{（ナ）}付件曆、但其中要枢公事、及君父所在事等、

別以記之可備後鑒、

とある。

「日中行事」の引用部分は、「次服粥、」という朝食に至るまでの日課を規定するものだが、朝起きてから属星（北斗七星の中の生まれ年の十二支に対応する星）の名号を七遍唱え、鏡を見て、具注暦を開いてその日の吉凶を知り、口を滌いで西に向かって手を洗い、仏の名を誦して崇敬する神社に祈念し、その次に昨日の出来事を（多く書く時はその日のうちに）日記に書けと命じている。この後にも続けて禁忌が書き連ねられ、さらに言動を慎むこと、粗食に努めることなどを挙げ、それらを実践することで長寿が保たれるとする。

「遺誠」の条文では、毎日の禁忌が細かく書かれた具注暦に、あらかじめ年中行事を注記して自らの予定（スケジュール）を管理するだけでなく、そこに昨日の公事や心得ざること（または特別なこと）を備忘のために記せと命じている。本条ではこの前（省略部分）に、少年期と青年期（元服後）の勉学の大切さを述べた後、早く本尊を定め、手を洗って宝号を唱える習慣を身に付け、その人の能力に応じて（できるだけ）真言を誦すように諭し、父藤原忠平（貞信公）から聞いた「延長八年（九三〇）六月廿六日の清涼殿への落雷で、心の中で三宝（仏教）を信仰していた自分（忠平）は助かったが、仏教を敬まっていなかった藤原清貴・平希世が命を落とした」

という事例を挙げて「不信の輩」の早死と「帰真の力」の除災効果を説き、さらに「信心貞潔智行の僧」とできるだけ多く語ることが現世のみならず後生（来世）のためにも重要だとしている。つまり、禁忌を守り信仰を篤くして長寿と来世の安穩を目指すという宗教的な行為と連続したところで、日記を付けるという行為が位置付けられている。私的な日記を付けるという習慣は、朝儀を行うという政治・社会的な活動のみならず、生活・信仰と一体化して形成されていたのであり、まさに「文化」として定着した様相を知ることができる。

しかし、貴族が日記を付ける目的は生活・信仰のためではなく、朝儀をまっとうすることにあつた。それは「遺誠」第一条の傍線部分に「特に重要な公事（儀式）と天皇や父親が参加した事柄については、別に書いて後日の亀鑑（手本）にせよ」としていることから明らかである。そして、この「別以記之」という「別記」の書き方に、「古記録文化」の形成と意義を解明する鍵が隠されていると思われる。

これまでの研究では、「日中行事」「遺誠」の両方に共通して「毎日、具注暦を見て日の吉凶を知り、日記を記せ」とあることから、日記は具注暦に書くものというこのみが強調され、¹²⁾「別記」の書き方や保存方法など形態に関する考証はほとんどされてこなかった。それには、撰関期唯一の自筆本が残る藤原道長の日記『御堂関白

「記」が、具注暦記しかないことも影響したと考えられる。けれども、「遺誠」で日記の付け方に関して、具注暦に記すだけでなく、重要な行事については「別記」を作れと誠めていることは、師輔自身もそれを実践していたという証であり、その形式や具注暦記との関係が解明されなければならない。そして、師輔は父忠平の教えを重んじており、¹³ しかも『貞信公記抄』天慶八年（九四五）四月十六日条に「延喜八年私日記授^{（貞信公記）}大納言、為^{（師輔）}令書取一両有要事、」とあるように、忠平の命によりその日記『貞信公記』を書き写していることから、日記の付け方を忠平から受け継いだと見られる。

『貞信公記』は、ある程度まとまった形で残されている最古の私日記であり、そこから「古記録文化」の形成を窺い知るための情報が得られると思われる。

三 『貞信公記』——藤原忠平による日記記載方法の確立

藤原忠平（八八〇～九四九）の日記は『貞信公記抄』（大日本古記録）として伝わっている。忠平は天皇とのミウチの権力集団と太政官機構をつなぐ藤原氏の摂関政治を安定的に運営してその儀礼を集大成し、¹⁴ 晩年には小野宮流の祖となる実頼と九条流の祖となる師輔という二人の息子をも廟堂の中枢に据えて継承させたのであり、「古記録文化」についても確立者として位置付けることができる。

それは先述したように師輔にも「有要事」を書き取らせていること、『貞信公記抄』が実頼の手によって書写されていることなどからも明らかである。ただし、『貞信公記抄』が今日一般的な「抄録（抜粋）」という意味での「抄出」であったかは慎重に検討し直す必要がある。¹⁵

『貞信公記抄』を通覧すると、忠平が参議・中納言・大納言・右大臣であつた延喜年間（九〇一～九二三）の記事は極めて簡略で目錄的であり、左大臣であつた延長年間（九三三～九三一）の記事は精粗が混じり合い、摂政・関白・太政大臣であつた天曆年間（九四七～九五七）以降に詳しさを増す。その理由はこれまで「抄出者の『貞信公記』に対する関心の在り方」とされてきた。¹⁶ 確かに現存する『貞信公記抄』には「私記」として抄出者である実頼がコメントを書き入れており、巻による書写方法の違いを見ることはできる。しかし、実頼は父忠平の日記に絶対の信頼と敬意を持つて接したはずであり、記事に大きな改変・省略を加えたとは考え難いのではないだろうか。むしろ、現存の『貞信公記抄』は基本的に原形を忠実に書写し、改変を加えたところに「私記」として注記したと見て、そこから忠平の日記記載方法を探るべきであろう。

まず『貞信公記抄』と逸文の記載方法の相違である。両者が残されている条文は延喜八年（九〇八）四月廿日・同年六月廿八日・同九年正月十一日の三条であり、『貞信公記抄』（九条家本）では「参

警固」「有読奏」「南庭除目」という首書標目のような記し方であるのに、『北山抄』に収められた逸文では、それぞれ賀茂祭警固における左大臣藤原時平の言動、郡司読奏の儀式、除目における左大臣藤原時平の作法が記されている。前者を後者の抄出と見るにはあまりに簡略すぎるのであり、これこそ具注暦記と別記の書き分けであつたと見なすべきであろう。

それは、『貞信公記抄』天慶三年（九四〇）六月十八日条に〔左中弁公卿令縁^{（藤原在衡）}兵事、左丞相許不等伝告、随^{（定々）}其議定^{（可）}給^{（官符）}仰了、其^{（一）}、可^{（令）}山陽道使追捕純友暴惡士卒事也、自余在^{（藤原）}別、』とあり、同八年十一月廿六日条に「以^{（予）}可^{（為）}戸主事、仰在^{（藤原）}別、忠仁公之例也、』とあり、天曆二年（九四八）三月卅日条に「中使公輔朝臣有^{（傳）}勅語、其旨在^{（別記）}、』とあることから窺える。これらは天皇の詞（勅語）に関するところで、後述する『権記』の目録との関係も考察しなければならないが、同様に他の重要な儀礼などに関する別記が存在したことは十分に想像される。

つまり、『九条殿遺誡』で厳命されている具注暦記と別記の書き分けは、忠平自身によって実践されており、『貞信公記抄』は基本的に具注暦記の記載を書写したものであつたと考えられる。さらにその形跡を辿っていききたい。

現存する九条家本『貞信公記抄』は十巻であるが、もとは二十巻であつたと判明している。そのうち最初の巻一（延喜七・八・九十

年）・巻二（同十一・十二・十三・十四年）・巻三（同十八・十九・二十年）・巻四（延長二・三年）は、月ごとにしか改行せず、複数の日の極めて簡略な記事が一行内に書き込まれている。また延喜七年には「五月無^{（事）}、』として忠平の記載がなかったという注記もある。一日の記事が数行にわたるものもあるが、儀式の詳細を伝えるものは稀で（延喜七年八月一日条の句など）、例外的なことを記す場合が多い。逆に重要な儀式については標目のような記し方で済まされており、それらに関する記事が別記にあつたことを示しているようである。なお、巻五以降に書写方針が変わって一日条ごとに改行されているが、それは巻四から一日条の記載が長くなっていることを受けての変更と考えられる。また、巻四に朱書で首書標目（首付）があるが、それは建保四年（一二二六）に加えられたものである。^⑦

特異なのは巻七（天慶二年・三年記）で、巻頭に「目録」があることである。その項目は二年が「大饗^{（不外出）}」「七日節会」「射礼」「射遣」「園韓神祭、無^{（上卿）}可^{（行）}事」「将門事、不^{（録）}」「覧^{（円堂）}会舞童」「賀茂祭、斎王依^{（雨）}不^{（渡）}河、」「出羽賊乱」「神今食、依^{（方）}忌^{（不）}幸」「繁時叙位事」「祈雨事種^{（重カ）}可^{（被）}行」「於^{（法性寺）}行^{（法事）}」「御書始」「新嘗祭、依^{（納言）}以上不^{（参）}無^{（行）}幸」「臨時祭、宣命参議奏事」「陰陽寮依^{（准）}三宮進^{（新曆）}事」「従^{（内給）}誦經卷数・度者等」の十八、三年が「穢間伊勢使立」「奉幣諸社、依^{（御斎会間）}不^{（奉）}伊勢」「兵部手結、公卿不^{（参）}」「賭射停止事」「奉^{（幣）}伊勢、参

議為_レ使_二「中宮親王元服」「天台座主贈位」「四月旬、依_二厨家不_レ饗於_二侍從所_一取_二見參_一」の八しかなく（三年七月から十二月の後半は本文もない）、そのほとんどが年中行事・臨時の儀式に関するところである。いずれも本文に記載があるが、目録に取り上げられない重要事項も多く、目録としては中途半端な印象を受ける。特に「将門事、不_レ録」という項目は、三月三日条の「源経基告_二言武蔵事_一」に対応すると考えられるが、なぜ「不_レ録」とあるか不明である。他の巻にないので目録の製作者を特定することもできないが、記主の忠平か抄出者の実頼が別記との関係を示した可能性がある。

『貞信公記抄』は具注曆記（具注曆に記されていた記事）を書写したもので、記述がまったくない月にはその旨を注記してあることから、記載があつたものを省略したとは考えられない。それに対して、例えば節会や大饗のような当時重要視されていた儀礼が簡略で標目的な記事しかないことは、それらが別記にまとめられていたことを窺わせる。ただし、『貞信公記抄』に別記の記事を書き加えたこともあつたようで、その痕跡が錯簡や異例日付表記となつて表われている。

錯簡が見られるのは、巻九の天慶九年（九四六）十一月の条で、

十一月六日、癸巳、可_レ行_二大嘗会_一之状宣命使奉_レ遣_二伊勢、大_{（師輔）}将行_レ之、大神宮依_二正殿傾_一、造_二借殿_一暫可_レ奉_レ遷事_一、付_二

此使、

十八日、大嘗祭畢還_二御本宮_一、更可_レ幸_二豊樂院_一、而近代例、従_二大嘗宮_一、便幸_二豊樂院_一、為_二之何_一、叙位議承平例丑日行也、可_レ依_二彼例_一歟、卯日供_二奉神饌_一采女前例須_{（前例）}叙位、仍彼此望申、其申_{（也）}一人最子可_レ奉仕、今一人桜井男子・河内有子、若競申、而男子陪膳方多、有子年方勝也、以誰可_レ令_二奉仕_一乎、又伊勢大神宮正殿度々使申_二不_レ開之由_一、仍造_二借殿_一奉_レ遷、可_レ直_二正殿_一之状宣命使奉_レ遣了、而告_二斎王薨由_一使惟時_{（兼也）}王申云、開_二正殿_一了云々、為_二之如何_一、

十四日、叙位議、大納言執筆、大臣昨今物忌、不_二参入_一也、

十五日、位記入眼請印、

十六日、大嘗祭、

十七日、晩頭中使公輔_{（師輔）}来云、忌部奉_二劍鏡_一事、至_二承平_一三代日記不見、何因所_レ停乎、

という、四月廿日に受禪した村上天皇の大嘗祭関係の記事である。この時、忠平は六十七歳で関白・太政大臣という名譽的な地位にあり、実務の統括者として指示する立場というより、やや傍觀的な立場に立っていたことを考慮しなければならない。問題となるのは十四日条の前に置かれている十八日条であるが、これについて大日本古記録は「十八日_{（初）}」として八日条の可能性を示すとともに、別に

「底本ハ此處改行セルモ、或ハ八ハ七ノ誤ニテ、前行ニ続き、六日條ノ中ナランカ」という傍注を付けて十七日のことについて書いた六日条の記事とも解釈している。記事の内容は、辰日（十七日甲辰）に天皇が主基殿での儀を終えて豊樂殿に移動する際に（『儀式』四の記載通りに）本宮に一度戻るべきかということで、これを十七日に尋ねられたことを十八日に記したと見ることもできる。

しかし、続けてそれ以前の神饌供奉を奉仕する采女への叙位や伊勢大神宮正殿の造替を検討する記事があることは不可解である。何より、十七日条の中使（天皇からの使）として来た橘公輔から尋ねられた忌部が神璽の鏡剣を奉るべきか否かという記事とは違い、誰とのやりとりなのか明記されていない。また、十六日（癸卯）条は「大嘗祭」とあるだけで、詳しい記事が別記または裏書にあった可能性があることから、それに付随して記されていた一連の問題点が混入したと見ることはできないだろうか。いずれにしても、抄出者（または書写人）を混乱させるほどの記事があったのである。

異例日付表記は卷十の天曆元年（九四七）正月十四日条で、

十四日、空中有^レ声如^二雷鳴^一、或人云、天智天皇山陵鳴也、又云、非^二山陵鳴^一、

十四日、今日内論義、僧依^二御物忌^一不^レ召^二御前^一、於^二南殿西行^一、

として、同じ日付が二つあり、空中怪異のことと御齋会内論義のことが記されている。これは、天皇の仏事に関する別記が存在し、そこからの記事が加えられたことを意味している。

仏事については、「天慶十年（天曆元年）」冒頭に「^{（中略）}殿御修善・祈禱等不^レ記、依^レ在^二別記^一、」とあり、天慶九年正月十日条に「有^二御修善事^一、而依^二別記^一不^レ記、後々不^レ可^レ記、」とあることから、忠平の個人的な修善・祈禱についての別記があったことは明らかである。¹⁸⁾さらに同年三月十五日条の「内裏御修始、以^{（法親王）}延昌律師^{（中略）}為^二阿闍梨^一、」という記事に判読不明の細字註があり、大日本古記録（存疑箇所部分写真¹⁴部分）は「藤原実頼私記カ」とするが、別記にあったことの注記と考えることもできる。そうだとすれば天皇の仏事についても別記があったと判断され、天曆元年正月十四日条の二つ目の記事は、具注暦記を書写する際に別記にあった内論義の記事を加えたと理解できる。

『貞信公記』については判断材料が乏しく、想像を重ねることになったが、もしこのような解釈が成り立つならば、『貞信公記抄』は原具注暦記の忠平の記載を書写したもので、それとは別にその具注暦記と並行して書かれた別記の記事が諸儀式書に引用されたことになる。具注暦記と別記の関係を明確に提示することはできないが、少なくとも別記の形態が部類形式であったことは指摘できる。

また、実頼は書写するにあたって、部分的には別記から書き入れ

たり、省略を加えることもあったが、改編には原則的に「私記」を付して明示しており、その範囲は極めて限定されていたと想像される。そうだとすれば、『貞信公記抄』の記載が年代を追って詳しくなっていくのは、基本的には忠平が日記を付けることに慣れて具注暦記への記載を詳しくしていたことを反映していると考えられる。

『貞信公記抄』第一巻（内題は「貞信公御記抄」）の冒頭にある年記「延喜七年」に割注で、

私記、昌泰三年正月任^{（千多）}参議、二月停任、是依^{（藤原）}法皇命^{（清經）}讓^{（清經）}清經朝臣云々、延喜八年正月十三日又任^{（千多）}参議、

と実頼が記しているように、忠平は昌泰三年（九〇〇）二十一歳で参議となるも、宇多法皇の命によりその地位を叔父清經に譲り、自らは右大弁となって太政官の事務に携わった。参議に還任したのは、兄時平が没する直前（前年）の延喜八年（九〇八）であることは、兄弟間の対立があったことを予想させる。その後、兄仲平を越えて権中納言に昇進し、大納言を経て、同十三年に右大臣源光が薨去したことで、右大臣となって廟堂の首班となるが、延長二年（九二四）まで十年近く右大臣に据え置かれたことは、醍醐天皇との関係も良好でなかったことの表れである。¹⁹このような複雑な昇進を辿った忠平の日記が、議政官に復帰する前年から残され、その冒頭に実頼が

忠平の年譜的な注記を付けていることは重要である。延喜七年が『貞信公記』の起筆であるかは不明だが、少なくとも実頼が書写する段階では、これが始まりと認識されていたことを意味するからである。そして、先に考察したように、同年五月の記載がなく、また延長年間までの記載が極めて簡略だったことは、具注暦に記される日記の原初形態を示し、それ以降に記載を多くしていったと見ることができ、その間に、具注暦記と別記の書き分け方法が模索された可能性も十分に考えられる。

具注暦記と別記の書き分けの創始については慎重に検討されるべきであるが、そのような筆記形態を含め、忠平の『貞信公記』が以後の歴史に与えた大きさは計り知れない。彼が生涯にわたって日記を付け続けたことで、日記を付けるという行為は役所の仕事ではなく、生活・信仰と一体になり、それを子孫に書写させたことで、私日記も公的な意味を持って活用されることになったからである。以後の日記とは異なり、『貞信公記』に先行する私日記の引用・指摘が一切認められないことが、何よりも歴史の転換を象徴している。すなわち、忠平は、貴族が日常の行為として日記を付け、それを社会的に保存・活用するという「古記録文化」を形成させた最大の功績者であった。

四 『清慎公記』と『延喜天曆御記抄』

——部類形式の日記とその活用

藤原忠平によって形成された「古記録文化」は、それ以降、いかなる展開をするのであろうか。子息たちの日記を中心に、それらの存在形態に留意しながら検証していきたい。

忠平の長男である実頼（九〇〇～九七〇）の日記『清慎公記（水心記）』は逸文しかなく、その原形に辿り着くのは難しい。その中で、実頼の孫（三男齊敏の息）で養子でもある実資の『小右記』に引かれた次の二つの記事は極めて重要である。

『小右記』長和四年（一〇一五）四月十三日条に、

左衛門督（實）教通、家焼亡者、大納公任（實）同宿、「中略」大納言云、一物不取出（實）、「中略」昨日故殿御日記季御読経卷依「大納言御消息奉送」云、問「案内、不取出、太口惜々々、又年中行事葉子二帖・鈔抄二帖同以焼亡、至葉子等不取惜、只故殿御記嘆思々々、

とあり、藤原公任（実頼の次男忠頼の息）が住んでいた藤原教通邸の焼亡により、前日に貸していた『清慎公記』の「季御読経卷」が

失われたという。また、寛仁四年（一〇二〇）八月十八日条に、

関白使（藤原頼通）「大工頭輔尹」被令云、「中略」唯鹿嶋等例未（命）能尋得（能）許也、有故小野宮例文（藤原実頼）歟、可写送者、令申云、被時文書者故三条殿悉焼亡、見御日記無其事、件御日記大納言為（藤原忠）合部類切寄、如此之間漏（令）歟、（失）

とあり、公任が『清慎公記』の部類を作る際に切り刻んで散逸させたと実資が語っている。これまでは特に後者の記事が重視され、『清慎公記』も後人によって部類が編纂されたと見なされてきた。²⁰ところが前者の記事を読めば、実資が公任に貸していたのは「季御読経卷」であり、また『同』寛弘二年（一〇〇五）八月十四日条にも「天曆九年正月御八講故殿御記」とあり、公任が作成する以前に部類形式の『清慎公記』があったことは明らかである。実資は晩年に至るまで事あるごとに『清慎公記』を参照しているが、その内容の詳しさと検索の正確さを考え合わせると、部類形式の『清慎公記』を所持していたと思われる。それを編纂（類聚）された部類記とする従来の見解を完全に否定することはできないが、公任以前に部類形式に編纂された経緯を明らかにすることもできない。むしろ、実頼自身が具注曆記と並行して付けていた部類形式の別記だったという可能性を考えるべきであろう。²¹

同時代の部類形式の日記として、『延喜天曆御記抄』がある。『醍

醐天皇御記』と『村上天皇御記』を類聚したもので、現存するのは
仏事関係の記事を集めた一巻であるが、逸文などからもとは五十巻
で、第一巻から第十五巻が「年中行事」、他が「臨時」であったと
されている。⁽²²⁾ その初見は『後二条師通記』寛治七年（一〇九三）二
月八日条に「送^(源経信)消息於民部卿許、二代御記抄第二^(軌カ)帳十卷所^(示)送^(示)」
也、」とある記事で、二代の天皇の『御記』をまとめたのは院政期
に下る可能性がある。けれども、『宇多天皇御記』で試みられな
かった類聚という作業が『醍醐天皇御記』から見られることは、
ちように忠平の時代、またはその子息たちの時代に日記に対する意
識が変化し、『御記』も「古記録文化」の中に組み込まれたことを
象徴している。

残念ながらこの二代の『御記』については、その形態を復元でき
ず、具注暦記の他に別記があったという証拠も得られない。しかし
『醍醐天皇御記』については、かなり早い段階で部類形式のものが
存在していたことがわかる。『権記』長徳四年（九九八）三月廿八
日条に、

仰云、今日可有御論義例也、而神祇官齋院火災、非常之事也、
如^(レ)此之間為^(レ)之如何、抑可^(レ)檢御記、即依^(レ)仰給御厨子鑑、
開御厨子、見^(レ)延喜御記抄、或年注^(論義事)論義、或年不^(レ)注其由、

^(依多卷数、不見本御記、只見部類抄也) 村上天皇御記、諒闇時并康保四年無^(レ)御論義、諒闇不^(レ)可^(レ)准的、四年是有^(レ)凶事、又不^(レ)可^(レ)為^(レ)例、即奏^(レ)事由、

とあり、神祇官齋院に火災があったことで御読経の御前での論義を
中止すべきか否かについて先例を調べるために、一条天皇の仰に
よって鍵を給わって御厨子所の『延喜御記抄（醍醐天皇御記）』と
『村上天皇御記』を見て報告したことを記している。注目されるのは
『延喜御記抄』について割注に「卷数が多いので、本御記を見ずに、
ただ部類抄だけ見た」とあることで、これにより『醍醐天皇御記』
には「本御記」（自筆本か）と「部類抄」の二種類あったことがわ
かる。行成は、その両方を見なければいけないと認識しながら、ま
ず「部類抄」だけを参照して報告したのである。「抄」が編纂・抄
出・書写のいずれを意味するか不明だが、村上天皇の親撰で忠平の
五男（四男とも）師尹が注を付けたとされる『清凉記』に「延喜七
年九月十一日御記抄」が引用されていることから、『醍醐天皇御記』
の「部類抄」は村上天皇ないしはその命によって編纂されたと考え
られる。⁽²³⁾

それに対して『村上天皇御記』について、行成は何のコメントも
加えていない。『権記』寛弘元年（一〇〇四）三月二日条に「参内、
令^(レ)御覧村上天皇御記抄土代、」とあるように、「村上天皇御記抄」の土代
（草稿）を行成が作成して一条天皇の御覧に供しているから、先の

先例調査の際にはなかったはずである。もちろん行成が『村上天皇御記』すべてを見たことも否定できないが、非常に短時間で調べていることから、部類形式の別記（自筆本）があり、それを参照したと考えることもできる。先述したように、同時代の『外記日記』も部類形式で書かれて保存・活用されていた。忠平の影響を受けたであろうし、村上天皇自身が『御記』を部類形式で残す必要性を感じていたのだとすれば、自らの日記に部類形式の別記を付ける方法も採用していたことは十分に考えられる。

『清慎公記』と『村上天皇御記』については確実な史料がなく想像の範囲であるが、時代状況を考慮すれば、具注暦記と並行して部類形式の別記を付け、そのうちの後者の方がより多く活用されていた可能性は否定できないであろう。特に『清慎公記』については、実頼が父の『貞信公記』を書写していること、さらに弟師輔の『九暦』にも同様の形態が認められることから、その可能性が高い。次に『九暦』について少し詳しく検証したい。

五 『九暦』

―具注暦記としての『九暦抄』と別記としての『九条殿記』

忠平の次男である師輔の日記『九暦』（大日本古記録）については、『九暦抄』という日記と『九条殿記』という部類形式のものがあ

り、両者の関係について多くの先行研究がある²³。諸説に違いはあるものの、その日記名が「九条殿御暦記」「九条暦記」に由来していることから、具注暦にすべて記載していた「原九暦」があったという先人観にとらわれ、そこから抄出した『九暦抄』と「別記」が作られ、後者の集成として「部類」ないしは「年中行事」を整理する途中の未定稿本が『九条殿記』であるとする見解が支配的である。ところが、『九条殿遺識』で具注暦記と別記を書くように子孫に対して戒めているのであるから、師輔自身がそれを実践していたと考えるのが妥当であり、そうだとすれば自ずと違った結論が見えてくる。つまり、先の『貞信公記抄』と同様に『九暦抄』が師輔の具注暦記を写したものであり、『九条殿記』は別記の実例を伝えていることになる。

『九条殿記』にはともに九条家旧蔵の天理本（天理図書館蔵本）『九条殿御記』²⁴と書陵部本（宮内庁書陵部蔵本）『九条殿記』²⁵とがあり、天理本は、

第一巻…中宮大饗（本文欠）・東宮大饗・大臣大饗

第二巻…五月節・駒牽・菊花宴・殿上菊合

第三巻…奏成選短冊事・擬階奏事・灌仏（巻頭目録にない）・

奏御暦事・御体御卜・大祓事・荷前事

書陵部本は、

第一卷：飛駅事・開閑事・飛駅式

第二卷：中宮遷御・前后追復本号

という構成になっており、少なくとも十九項目あったことが窺える。そして天理本には第一巻に「九条殿御記^{部類} 年中行事^二」という外題、第三巻に「九条殿御記^{年中行事}」という外題と「年中行事」という墨書題の横に「此外題云、九条殿別記^{有レ之}、是師輔公乎、」という九条兼孝（一五五三―一六三六）による書き入れがあり、書陵部本の第一巻には、表紙外題に「九条殿記」、表紙見返しに「臨時」とある。近世の書き入れではあるが「別記」と呼ばれ、「年中行事」と「臨時」に分かれていたことがわかる。

これらの成立時期は不明で、「原九曆」からの編集とする見解を覆すほどの確証はないが、記事内容や引用された書物や先例は師輔の時代に存在したものばかりで、ほぼ全文が師輔によるものと見て大過ない。しかも天理本第二巻の途中に「私記」と書かれていることは、その記載に師輔自身が責任を持っていたことを示していると思われる。

さらに注目されるのは、『九曆抄』との関係である。『九条殿記』天理本第一巻の「大臣家大饗」に「曆云」（天慶元年・同四年・天曆

七年の正月四日条）と「曆記」（天曆七年正月四日・五日条）として三箇所ずつ、いずれも割書または傍書で補足的な注記がある。これらの年の『九曆抄』がなく比較できないが、師輔が具注曆に記していた内容を指すと見てよいと思われる。また、問題とされてきた天理本第二巻の「五月節」の天曆七年（九四四）三月七日条に「此記可^三重書^二入年中行事^一、」との傍書があり、同条と五月五日条の間に「以上可^三改書^二、」^{（可カ）}「二^レ入^二年中行事^一、」の二行が挿入されている。両方とも本文でないことから、これも具注曆記に記されていた字句で、別記の「年中行事」に改めて書くという注記であった可能性が指摘できる。あるいは後半の五月五日条は「二」としてあったのを「年中行事」に入れ、前半は書き直すべきと注記したのかもしれない。いずれにせよ、この年の「五月節」の記述は一万字を超える長大なもので、自らの具注曆記や諸史料を参考にしながら時間をかけてまとめたと考えられる。これだけの長文は、具注曆の裏書に書くとしても一巻（半年分）の半分以上を必要としたはずで、実用性にも欠ける。具注曆記ではなく別記として普通の紙に記されたことは疑いないであろう。²⁷⁾

『九曆抄』は七年分しか現存しないが、具注曆記の筆記形態を窺うことができる。記載の特色として『貞信公記抄』と同様に目録的な記事と普通の日記風な記事との混在を指摘できる。天曆二年（九四八）正月五日条は比較的長く書かれた右大臣師輔自身の大饗

記事である。『九条殿記』天理本第一巻の「大臣家大饗」の同記事と比較すると、『九条殿記』の方が若干詳しい程度ではあるが、前半部分に編年の順番の乱れが認められる。同じく師輔の大饗記事である同三年正月十二日条に至っては、『九条殿記』の方に省略が認められる。これは当該記事のような特に重要な儀式については具注暦記（『九暦抄』）と別記（『九条殿記』）の両方に書くという意識が働いていたことを示している。

師輔が年中行事について別記を付けていたことは、『九暦』逸文（『西宮記』巻四・七月十六七日相撲召仰の勘物所引）天暦十年八月十八日条の相撲記事や『九暦断簡』同四年八月十日条の积算記事に「具由在別記」とあることから明らかである。また、『九条殿御記』第二巻にある「天慶元年九月七日信濃駒牽日記」「天暦五年十月五日菊花宴記」や第三巻にある「天暦元年荷前雑事」という書き方は『外記日記』と共通し、別記の書き方を伝えていると考えられる。そして、陽明文庫に古写本がある『九暦記 貞信公教命』は、父忠平の儀式に関する言葉をまとめたものであるが、これも具注暦記とは別に父の言動をまとめて書いた別記と見れば、まさに『九条殿遺誠』にある「君父所在事等」を別に記して「後鑒」に備えることを師輔が自ら実践していた証といえる。

このように『九暦抄』と『九条殿記』などが具注暦記と部類形式の別記との関係にあったとするならば、『九暦抄』には標目的な

「〇〇事」という記事が多く、それに対応する別記と見られる記事が『九条殿記』や儀式書に引用された逸文にあることも、師輔の日記の付け方として説明できる。例えば『九暦抄』天徳四年（九六〇）正月十一日条の「左大臣家大饗事」と翌十二日条の「家大饗事、有儀」について『九条殿記』に詳しい記事があり、十四日条については『九暦抄』の「御斎会了参八省」の七字を除いた同文が『九条殿記』にある。特に『九暦抄』で単に「〇〇事」とあって「儀」「有儀」「有子細」などと注記されているものは、師輔自身が部類形式の別記を作っていたことを示したと考えるのが妥当で、これを頼りに別記（『九条殿記』）の全体像を復元できると思われる。²⁵

師輔は天徳四年五月二日に出家（臨終出家）して四日に薨じているが、『九暦抄』は同年四月三日条、『九条殿記』は同年正月十一日・十二日・十四日の大饗記事まであり、自分で日記をまとめたおすことはできなかったと考えられる。それだけに『九暦抄』では、最後に「「」日後出家、^{名法}」という後人の書き込みが認められるものの、大体において具注暦記の記載を写し取り、『九条殿記』についても検討の余地はあるが、「未定稿」の部類記ではなく、師輔の別記をそのまま書写したと見なすべきであろう。

『九暦抄』については『貞信公記抄』と同じく「抄」とあることが疑問視されるかもしれないが、「抄」には「写し取る」という意味もあるし、『貞信公記抄』の書写方法が特別な記事にのみ干支・

暦注を記しているように、記主の記載がある部分と必要な暦注のみを抜粋したという意味であつたかもしれない。または日記に名称を付ける時になって、簡略な記述であることから「抄出」と見なされたとも考えられる。

『貞信公記抄』『九暦抄』とも抜粋という意味での「抄出」であり、『九条殿記』が部類形式であるがゆえに後世の編纂であるという先入観を棄て、具注暦記と別記との書き分けを総合的に検証し直す必要がある。

六 『親信卿記』——具注暦記と別記を統合する試み

先に平安貴族が日記を付けて保存・活用した「古記録文化」の形成には、公日記の存在が大きかったことを指摘した。特に天皇に直接奉仕する蔵人が付けていた『殿上日記』との関係が注目されるが、残念ながら逸文しか残されていないので、その存在形態を分析することはできない。藤原忠平に蔵人の経験はなく、実頼も醍醐天皇の延長四年（九二六）二月廿五日から翌々年正月七日までの約二年間に蔵人、同八年八月廿五日から朱雀天皇の承平元年（九三二）三月十二日までの約半年間に蔵人頭を勤めただけであるから、私日記を中心とした「古記録文化」の確立に与えた『殿上日記』の影響力を過大評価してはいけない。しかし、師輔は実頼の跡を継いで同年閏

五月十一日から同五年二月廿四日まで蔵人頭を勤めており、その間の承平二年正月四日の忠平大饗記事から『九条殿記』（別記）の記載があることは、その職掌との関係を窺わせる。^③

そして、実頼の小野宮流では養子（実孫、三男斉敏の二男）実資、師輔の九条流では曾孫（伊尹の孫、義孝の長男）行成が出て、ともに長期間にわたり蔵人頭を勤め、その時代から充実した記述を書き続けて、それぞれ『小右記』『権記』を残したことは特筆に値する。それらの記載は同時代における藤原道長（師輔の孫、兼家の四男または五男）の『御堂関白記』とは比較にならないほど多く、具注暦へ書き込むだけでは足りなかったはずである。日々の記録をどのようにしていたのか、また自らの日記をどのような方法で保存・活用していたのかを検証するためにも、蔵人の日記という視点から「古記録文化」の展開を考察しなければならない。そこで注目されるのが、『親信卿記』である。

平親信（九四六―一〇一七）の日記『親信卿記』は、天禄三年（九七二）三月から天延二年（九七四）十二月までの三年間分（四巻）しか残されていない。^④これは親信が天禄三年正月廿六日に円融天皇の六位蔵人となり天延三年正月七日にその旁により従五位下に叙されて退くまでの期間に限られるもので、同じく六位蔵人を一条天皇のもとで勤めた子息の重義・行義らのために、散位であつたと思われる永祚元年（九八九）から正暦二年（九九二）に抄出・編集され、

「家記」として子孫に相承されたと考えられている³³⁾。

その存在形態は特異で、同じ日の二カ条以上の記事（日付の記事と「同日」の記事）を合わせた条文が合計二十三例（二十八箇条）あり、しかも通常省略されている干支が後の記事に加えられている場合があること、同一内容の記事が日付にかまわず合載されたり連続されたりしていたと見なされる例が三箇所あり、誤入（七箇所）・重複（六箇所）も見られること、追記や関連する儀式次第の文が挿入されていることから、「日次記」（原『親信卿記』）から部類記が作成され、それから再び「日次記」の形に復元（還元）されたとの結論が導き出されている。しかし、統一して記載していた「日次記」を部類化し、もう一度「日次記」に戻したという想定には無理があり、先に考察した『九曆』の『九曆抄』と『九条殿記』との関係と同様に、具注暦記と部類形式の別記を並行して付けていたものを、蔵人在任期間の必要記事に限り統合させたと解釈するのが妥当であろう。

『親信卿記』の中で「別記」と記載されているのは、天禄三年十月十日条の二つ目の記事「同日」条の割注に「着御錫紵、其子細在別記」とあるものが唯一であるが、その別記は同日条の一つ目の記事「十日、有^{（藤原伊尹）}故太政大臣并源兼子薨奏事」という式次第や倚廬の図を書いた部分に相当すると考えられる（61-2②³³⁾）。『親信卿記』には他にも死亡や薨奏・錫紵・葬送に関する記事があり、

それらの「凶事」を「別記」として具注暦記と別に普通の紙に書いていたことは十分に想像できる。

つまり、親信は蔵人として奉仕しながら、先例や式文（蔵人式など）を参照して必要記事を項目別に「別記」としてまとめたものであり、具注暦記と複数の「別記」に別々に書かれていたものを子息のために統一（合体）させて現在の『親信卿記』の形態にしたのである。その際、必ずしも具注暦記の記載が優先されるわけではなく、より詳しい「別記」の記載を先にしたり、正確に具注暦記に組み込めなかった部分があつたはずで、他の条文の異例日付表記などの不備もこの見解に基づいて十分説明できる。これまで『親信卿記』に「別記」があつて復元時に優先されていたという指摘がなされてきたが、あくまで「一旦部類に分けられた記事」を「同じ日にかけて復元した操作の跡」と見なされてきた。しかし、親信が並行して具注暦記と部類形式の別記を付けていたとすれば、自身による日記の編集は二回ではなく一回ということになる。

『親信卿記』には各条文に項目名を注記した首書標目（首付）が付されており、これについては伝来過程を考慮した検証が必要である。唯一の古写本である陽明文庫本のうち、第一巻と第四巻は親信から数えて五代目となる信範（範国の曾孫）の写本で、第一巻（天禄三年）の奥書に、父知信のもとに伝来した折紙上下に書かれていた正本が保安元年（一一二〇）に焼失したため、実親（範国の弟行親

の曾孫)のもとに伝来した行親の書写本を、長承二年(一一三三)に忠実に書写したとある。

ここから折紙という簡便な形式に書かれた「正本」が親信による部類記で、孫の行親の時までに本記の復元がなされて現在の形になったとの推測がなされてきた。けれども、行親は折紙の形式を巻子に改めただけで内容に変更を加えなかったとすれば、現『親信卿記』は親信自身が一回だけの編集をした形式を伝えるもので、それに首書標目を書き入れられたことになる。その首書標目は、同一行事について異なる項目名が付けられ(天禄三年九月十三日条「例幣」と天延二年九月十一日条「八省行幸」〔25①②〕、藤原伊尹薨去記事の天禄三年十一月二日条「行免物詔書」が天延二年に誤って重出した方で「免物事」〔61-1⑤⑧〕、本文内容を正確に伝えていない(天禄三年六月十一日条〔19①〕)などの例が散見され、さらに朱線を引いて「此事又有下如何」(天禄三年十月六日「同日」条〔61-2②〕)と頭書するなど、親信による編集の意図を理解していない注記が施されているところもあり、後世(おそらく院政期)に書き入れられたことがわかる。首書については、諸本の書き入れを検証し、『小右記』『左経記』の例ともあわせて日記(古記録)の利用という視点から捉え直す必要があるだろう。³⁴⁾

以上、平親信も具注暦記と部類形式の別記を並行して付け、さらに自身で年代を限って統合したものを作り、それが現存する『親信

卿記』であることを指摘した。さらに緻密な考証の上で編集方針や編集以前の形態を復元する作業(特に別記における部類項目の推定)が必要であるが、生前に複雑に書き分けられていた自身の日記を編年形式に編集し直す作業が行われたことは強調しておかなければならない。これが具注暦記と別記の全記事を統合したのか、それとも抄本(略本)なのかも問題として残る。ただ、高麗船の到来について、天禄三年十月七日条に「件二箇船、州各殊、年号不同、有公家定、彼日記・雑書等在別」とあり、天延二年閏十月卅日条に「高麗貨物使雅章還参事、在解文」とあることなどは(68①②)、ここに収録されなかった何らかの記事の存在を想像させる。これについては『権記』の「目録」とあわせて考えるべきであろう。

七 『権記』

——具注暦記・別記・目録・裏書の書き分けと統合

『権記』については、最古本である鎌倉時代書写の宮内庁書陵部蔵伏見宮本『行成卿記』二十二卷(増補史料大成本と史料纂集本の底本、以下、現『権記』とする)があり、藤原行成(九七二―一〇二七)が二十歳で左兵衛権佐であった正暦二年(九九二)から四十歳で権中納言であった寛弘八年(一〇一一)までの記事がまとめられている。行成は長徳元年(九九五)八月廿九日から長保三年(一〇〇二)八月廿五日まで一条天皇の藏人頭であり、それより前の日記は断片

的で、通年の記事が残るのは長徳四年からである。また、寛弘八年は天皇崩御の年であり、一条天皇朝の記録として絶対的な価値がある。長和元年（一〇二二）以降の記事もあるが、いずれも諸書に引用された逸文である。ちなみに極官で日記名の由来にもなった権大納言となったのは、四十九歳の寛仁四年（一〇二〇）である。

現『権記』（伏見宮本）のうち、標紙題簽に「略記」とある第一・三・四・五巻（長徳年間まで）と、もつと少ない記事からなる第十三巻以降の寛弘年間までは「略本」であること、さらに寛弘四年九月九日条の「参内、菊宴也、」という短い記事の別記が『重陽菊花宴記』（宮内庁書陵部蔵伏見宮本）の記事と考えられ、また、同七年七月十四日条に見える「別記」が『西宮記』（前田家卷子本・巻四、前田家大永鈔本・恒例第二）に引かれた同月十三・十四日条に相当するように、別記の記載が省略されている条文がある一方で、異例日付表記が認められる同六年五月一日条や同七年六月四日条では長文でも「別記」「別紙」の内容が引載されているという複雑な関係を指摘し、それらを中世における伝来過程の問題にも求めるべきとする見解がある。⁽³⁵⁾ 日記（古記録）の伝来過程における変質は重要であるが、それ以上に、具注暦記と部類形式の別記の両方を残す筆記形態が一般的であったことを勘案した上で、記主行成による記載方法と保存・活用方法が検証されなければならない。

諸本の調査をしていない段階での仮説ではあるが、現『権記』は

卷によって程度の差があり、具注暦記の原形を伝える巻が含まれるものの、基本的には具注暦記を基本としながら部分的に別記を挿入したもので、儀式書・部類記などに引用された記事（逸文）はもともと部類形式であった別記の文章を伝えていると考えられる。

まず、具注暦記と別記の関係から見ていく。最も留意すべき点は、行成が別記の他に目録を付けていたことである。それは『権記』長保二年（一〇〇〇）八月四日条に「詣^(藤原親光)右府、下^(藤原親光)草昧勘文等、子細在^(藤原道長)目録并別記、」とあることから明らかで、寛弘三年七月三日条では南所申文について「参内、左大臣^(藤原道長)給^(藤原)大和守頼親所^(藤原)申文、子細在^(藤原)目録、」とあり、諸道勘文を読むことについて「其後余披^(藤原)文、対^(藤原)御前^(藤原)端^(藤原)笏読申、先読^(藤原)記伝^(藤原)□□、次第在^(藤原)別記、」とあることから、両者が区別されていたことがわかる。すなわち、目録には文書（宣旨・奏文・申文・定文・勘文、勅命・仰詞や議事内容を含む）に関することが記されており、先述の『貞信公記抄』で見られた「勅語」を記した別記の系統とも、蔵人が作成していた奏書目録（天皇に奏上されてくる案件とその決裁を記録・保存した目録）に倣ったものとも考えられる。⁽³⁶⁾

他方、別記は儀式に関する次第が中心であった。⁽³⁷⁾ 単に「在^(藤原)別、」などと記される記事は内容に留意して判断する必要があるが、寛弘四年十月廿八日条に「参内、弓場始也、記在^(藤原)次第中、」とある「次第」とは別記を指すと見られる。また、具注暦記にあったと考えら

れる「裏書」には儀式の供奉者や勘引した書物の内容など簡単な書き足しや補足的な備忘と見なされるものがあるほか、夢など自身のプライベートに関することが多く、別記・目録との書き分けの跡が窺える。^③

『権記』の別記も『九暦』の『九条殿記』のようなものであったと想像されるが、残念ながらそのような写本は残されていない。けれども、現存する『権記』にも同一日付が二つある異例日付表記があり、具注暦記に別記を書き入れた痕跡を指摘できる。それらは、長徳四年（九九八）九月廿六日条（季御読経発願の具注暦記と別記）、寛弘六年五月一日条（上野勅旨駒牽の具注暦と別記で、二つ目の記事には「別記也、」と注記されている）、同八年十二月廿七日条（荷前の具注暦記と別記）などである。

そして、左大臣藤原道長の大饗を記した同五年正月廿五日条に「此日子細注^{（入脱）}付大饗日記之末、」とあることは「大饗」という項目のもとで別記を付けていたことを意味しており、やはり部類形式であったことがわかる。なお、大饗記事については、正暦四年（九九三）正月の条に「廿三日、壬子、参^{（藤原道隆）}摂政殿、大饗也、無^{（音）}二^{（音）}音^{（音）}、依^{（主忌月）}二^{（音）}主忌月也、」^{（右之源重信）}「廿四日、癸丑、参^{（藤原道隆）}左府、大饗也、」^{（藤原道隆）}「廿六日、乙卯、参^{（右之源重信）}左府、大饗也、」^{（藤原道隆）}「廿八日、丁巳、参^{（藤原道隆）}内府、大饗也、」とありながら、別記からと思われる詳細な次第が記されているのは廿八日条のみである。また長徳四年十月廿日条のように日付のみの

ものもあることから、日付が抜けている場合も書写段階の省略とは言い切れず、もとより記載がなかった可能性がある。これらの巻を「略記」とするのは、単に抄出したというのではなく、具注暦記と別記との統合の際に何らかの取捨選択がなされたことを示しているのかもしれない。

増補史料大成本の「権記補遺」では寛仁元年（一〇一七）八月の条を『立坊部類記』から復元しているが、それはもとから「臨時」の一項目に部類された「立坊」の別記の記載であったと考えられる。また「別記」との注記がなくとも儀式次第を細かく記している記事は別記からの挿入であった可能性があり、それらを検証することで、部類形式の別記にどのような項目があったかをある程度復元できる。

なかでも重要なのは、『親信卿記』と同様に死亡や薨奏・錫紵・葬送に関する「凶事」をまとめた巻があったことである。それは『権記』寛弘五年五月廿六日条に「薨奏、御錫紵等供^{（鏡子内親王）}之云々、記在^{（具平親王）}別、二宮御葬送此夜也、」とあり、同六年八月十四日条に「参内、申剋故中務卿親王薨奏、子細注^{（具平親王）}別、」とあり、同七年十一月十日条に「参内、行^{（具平親王）}薨奏等事、子細在^{（具平親王）}別記、」とあることなどから明らかである。また、現存する『権記』の最終年次にあたる寛弘八年の巻には、途中に「寛弘八年六月十三日、乙卯、」と年月日を示す条があり、これ以降にも「六月廿八日」「寛弘八年七月八日、己卯」「寛弘八年七月廿日、辛卯」「寛弘八年八月二日、癸卯」「寛弘八年

八月廿七日、戊辰」「寛弘八年九月十五日、乙酉」「寛弘八年十月十六日、乙卯」などとあることから、一条天皇に関する讓位・出家・崩御・葬送などについては死亡を扱った巻の別記がかなりの部分を占めていると考えられる。

ところが、長い儀式次第が書かれている記事すべてが別記というわけではない。寛弘四年二月廿八日・廿九日条の道長による春日詣の記事は「裏書」に書かれていたと注記されており、重要な行事で長文を要したにもかかわらず別記に項目が立てられていなかった。対照的に同年の同じ春日社に関することでも春日祭使（近衛府使）の出立儀については、十一月八日条に「参^{（兼版道長）}左府^{（兼版道長）}、参内、又詣^{（兼版道長）}祭使^{（兼版道長）}事、別記」とあるように別記の項目があった。ここから、定例化されている儀式については部類化された項目ごとの別記の紙に書き、そこに含まれない新しい儀式は裏書に書くという使い分けの情況が窺える。

では、「目録」はどのような形式だったのだろうか。確証があるわけではないが、あえて現『権記』の記載から探し出すと、長徳四年七月十三日条に（具注暦記の記載と考えられる三十五文字ほどの記事に続いて）「○○事」という項目立てをした十の記事あり、そのうちの八条に詳しい内容が記されている。そこに文書や宣旨の内容を書き入れることがあったとすれば、具注暦記とは別の普通の紙に書いた「目録」であり、目次と文書の用例集を兼ね備えた別巻が形

成されていたことになる。先に『親信卿記』でも高麗船の到来に関する日記（報告書）・雑書・解文などを書き残した可能性を指摘したが、それも「目録」的な形であったとすれば、藏人経験者によって前代に見られなかった「古記録文化」の進展がなされたことになる。そして「目録」が単なる目次ではなく日次記的な体裁をとっていたとすれば、中世に見られる具注暦記と並行して普通の紙に付けられた「日次記」^④の源流と見なすこともできる。「目録」については、日記の書写形態に与えた影響という視点からも検討すべきであろう。

八 統合版の作成者——『権記』長保二年正月廿八日条の分析

現『親信卿記』『権記』の存在形態は、具注暦記と別記の統合作業を裏付けるものである。そして、『親信卿記』のように年次が限られたり、『権記』のように巻ごとに精粗があることは、この統合作業が必ずしも記主の死後というわけではなく、あるいは子孫（娘婿を含む）のためという必要に応じて、あるいは閑職にあるとか人生の節目があったというような機会を利用してなされていたことを意味している。撰関期の日記については、『権記』のように現存のもの以上に記事があったことが逸文の存在から明らかであるものが多く、その起筆・擱筆を探る手がかりとされてきた。けれども、

「古記録文化」の実態を探るためには、自らの日記を統合する作業を経ている可能性を考慮し、その時期と意義を問う必要がある。

平親信は一条天皇朝に藏人となった息子のために、自らの藏人在任期間の日記をまとめて統合版を作成した。それが現『親信卿記』である。では、藤原行成は何時、統合版を作成したのであろうか。もちろん、長期にわたって筆録していたから、その機会が複数回あったことも考えられるが、最も重視すべきは、現『権記』（伏見宮本）が一条天皇が崩御した寛弘八年（一〇一一）で終わっていることではないだろうか。

行成は、一条天皇によって藏人頭に拔擢されて参議・権中納言へと昇進させてもらった。よって、特別な想いで天皇崩御までの日記（記録）をまとめたことは十分考えられる。それ以降も日記を付けていたとはいえ、統合作業をする機会（あるいは意欲）に恵まれず、万寿四年（一〇二七）十二月四日（藤原道長と同日）に急死してしまったとすれば、統合作業を経なかった諸巻はまとめられずに散逸したと想像される。その代表例が、先述した寛仁元年（一〇一七）八月の条がある「立坊」の別記である。

同様に「立后」の別記があったとすれば、これまでに指摘されている藤原彰子立后に関する現『権記』（伏見宮本）と複数の部類記に引かれた逸文との間で、文字の異同があることについての疑問も解けるのではないだろうか。⁴¹ここですべてを比較検証することはでき

ないが、顕著な特色を示す長保二年（一〇〇〇）正月廿八日条を取り上げて検討したい。

『権記』長保二年正月廿八日条は、彰子立后について宣命を下す日時を勘申させる「立后兼宣旨」が出された、いわば一条天皇から正式にゴースインが出た日の記事で、その事実とともに、藏人頭であった行成が藤原道長の意を受け、前年十二月一日の昌子内親王崩御以来（「此事去冬之末、太后崩給以来」、一条天皇を説得してきた苦勞を述懐している）に大きな特色がある。その文章は五百字程度であるが、『冊命皇后式』所収逸文と現『権記』の該当部分との間に二十箇所以上の文章・文字の異同がある。⁴²

最もわかりやすい箇所は、『冊命皇后式』所収逸文では述懐に入る直前「然而申_{（東三条院）}自_{（一条天皇）}院被_{（一条天皇）}伝仰_{（一条天皇）}可有_{（一条天皇）}便宜_{（一条天皇）}之由_{（一条天皇）}」と「上諾_{（一条天皇）}之_{（一条天皇）}」の間にある割注「先々伝_{（一条天皇）}事之人或有_{（一条天皇）}失_{（一条天皇）}、百之輩如_{（一条天皇）}此_{（一条天皇）}、大事々定之後、無_{（一条天皇）}相談_{（一条天皇）}之事_{（一条天皇）}、未_{（一条天皇）}定_{（一条天皇）}之旨_{（一条天皇）}、若有_{（一条天皇）}依違_{（一条天皇）}之時_{（一条天皇）}、非_{（一条天皇）}唯_{（一条天皇）}當時喧_{（一条天皇）}華_{（一条天皇）}、如_{（一条天皇）}招_{（一条天皇）}後代誹_{（一条天皇）}謗_{（一条天皇）}、仍_{（一条天皇）}為_{（一条天皇）}救_{（一条天皇）}其難_{（一条天皇）}所_{（一条天皇）}申_{（一条天皇）}也_{（一条天皇）}、」が、現『権記』にはないことである（『大』七二五頁十・十一行／『纂』一七九頁八行）。先日

の出来事として、兼宣旨を出すことを道長に伝えるよう一条天皇から命じられた際に、行成が東三条院藤原詮子（一条天皇の母、道長の姉）からの方がよいと述べたことについて、「後代の誹謗」を受けないためとの想いから言ったと書き加えた部分である。単なる割注の省略であり、後者を書写段階での失却によると見ることもでき

る。けれども、先の考察のように、『冊命皇后式』所収逸文が部類形式の別記からの文で、現『権記』は、彰子立后の記載に続けて結政に関する記事もあることから、統合版であった可能性が高い。そうだとすれば、前者から後者への書写がなされた時に省略されたとも考えられる。

異同は一字程度のもが多く、例えば「也」の有無について、前者にあつて後者にない場合と、逆に後者にあつて前者にない場合があり（『大』七二六頁二三行／『纂』一七九頁十三行）、また「停」と「止」（『大』七二六頁四行／『纂』同頁十四行）、「依_レ為_二長者_一」と「依_二氏長者_一」（『大』同頁六行／『纂』同頁十五行・一八〇頁一行）、「独勤_二行其祀事_一」と「独勤_二其祭_一」（『大』同頁六行／『纂』同頁一行）、「解」と「詳」（『大』同頁八行／『纂』同頁二行）、「所_二知食_一也」と「所_二察也_一」（『大』同頁八行／『纂』同頁二三行⁴³）という用語選択の相違もあり、単純に文字の多少・異同から前後関係を判断できない。しかし、何よりも特徴的なことは、他の日記の書写では見られない文章そのものの改変で、その内容の検討から書き換えの跡を見ることができると思われる。

この記事で行成が最も強調していることは、「我朝神国也、以_二神事_一可_レ為_二先_一」という神国思想と神事優先の原則を旗印として、今の藤原氏の皇后である東三条院・皇后（藤原遵子）・中宮（藤原定子）が皆出家して氏祭の奉仕を怠っているから、（二后並立になるけれど

も）もう一人彰子を立后して氏祭を掌らせるのがよいと主張して、一条天皇を説得した点である。そして、この前後に文章の書き換えがなされている。その中には『冊命皇后式』所収逸文にはない「如_二戸禄素飡之臣_一」が現『権記』にはあるということもあるが（『纂』一七九頁十行）、総じて『冊命皇后式』所収逸文の方が長く、「徒費_二公物_一、無_レ勤_二神事_一、論_二之朝政_一」の部分では現『権記』では「無_レ勤_二神事_一」がなく（『大』七二五頁十四行／『纂』同頁十一行）、「是漢哀乱代之例、其后皆被_二貶廢_一、退_二居別宮_一、事之不吉、具所_二觀摹_一、如_レ此可_レ避、抑初立_二之儀_一」は「是漢哀乱代之例也、初立_二之儀_一」（『大』七二六頁一二行／『纂』同頁十二行）、「令_レ掌_二氏祭_一、神明若享_二於議咎_一歟」は「令_レ掌_二氏祭_一可_レ宜歟、又」（『大』同頁四・五行／『纂』同頁十四・十五行）、「小臣以_二藤氏末葉_一、為_二氏院別当_一、預知_二諸氏祭之事_一、具知_二給其案内_一所_レ申也、」は「小臣以_二藤氏末葉_一、為_二思_二氏祭_一所_レ申也、」（『大』同頁七行／『纂』一八〇頁一二行）となっている。

これらは単なる誤写・省略・置換などではなく、内容的に『冊命皇后式』所収逸文より現『権記』の方が天皇に直言した内容の厳しさが軽減されており、極めて感情（主観）を込めた結果としてなされた改変のように思われる。そのような大胆な書き換えを行い得たのは、記主である行成において外には考えられないのではないだろうか。そして、その書き換えが、先に指摘した一条天皇の崩御を契

機としてなされた統合版の作成によるものとすれば、改変の意図も理解できる。すなわち、行成は一条天皇を追慕しながら、特に想い入れのある記事について別記から統合版（現『権記』）へと書き写すにあたり、その表現を和らげたと考えられるのである。

具注暦記と別記（および目録）を並行して付ける忠平以来の習慣を維持しながら、自らの手で責任のある統合版を作成しようという姿勢が平親信と藤原行成という藏人経験者二人に見られることは、『古記録文化』が一条天皇朝で新たな段階に展開したことを物語っている。ただ、親信は三年分、行成は寛弘八年（一〇一一）までという限られたもので、統合版を完成させたとは言い難い。特に行成の場合、『院号定部類記』に『権記』万寿三年（一〇二六）正月十九日条の逸文があることから、おそらく翌年十二月四日の急死直前まで日記を付けていたと思われるが、まとまった年の巻はなく、儀式書・部類記などに引用された条文（逸文）が伝わるだけである。これは、一条天皇の崩御に匹敵するような契機がなくて自身による統合版は作られなかったが、部類形式の別記は残り、それが活用され続けたことを意味するのではないだろうか。そして『冊命皇后式』に引かれた条文も別記からのものであったとすれば、寛弘八年以前の記事についても別記があり、そこからの引用がなされたと考えられる。

日記（古記録）を毎日付けるだけでなく、それらを社会全体で保

存・活用するという「古記録文化」の実態を解明するためには、個々の日記の存在形態を分析するだけでなく、儀式書や部類記の編纂や日記の引用方法との関連を解明しなければならないが、それについては今後の課題としたい。

おわりに

本稿では、まず藤原忠平とその子息たちによる日記の存在形態を復元し、いずれも具注暦記と部類形式の別記を並行して付けるといふ、『九条殿遺誠』の内容と矛盾しない記載方法を実践していたことを明らかにした。特に『九歴』は両方の原形に近いものを現在に伝えており、そこから別記については「年中行事」と「臨時」（あるいはさらに項目ごと）に分けて記録・保存し、具注暦記の方にも「儀」があるという注記を施し、相互を参照させる指示が付されていた。このような実態が浮かび上がってきたことで、大量の日記（古記録）が書かれ、残され、活用される「古記録文化」の成立期における精神に肉薄できたと考える。

従来の研究では、『九歴抄』と『九条殿記』という明確な相違がありながら、原『九歴』を想定した先入観により、両者が具注暦記と別記の関係にあると認識できなかったわけであるが、その先入観が生まれた理由も摂関期の日記（古記録）の存在形態にあったと考

日記名（すべて写本）	本稿の見解	従来の見解（概略）
		〈日記の付け方〉 原日記 …日次記の他に別記の存在を認めながら詳細は未解明
『貞信公記抄』『九暦抄』 『九条殿記』	〈日記の付け方〉 具注暦記 部類形式の別記 （部分的に別記の記載が混入） （「年中行事」「臨時」に類別） …並行して同時に付ける	→ 抄出本 → 年中行事・儀式書編纂のための草稿
『親信卿記』	↓ （3カ年分） 統合版	↓ 再統合版（3カ年分）
『権記』	（寛弘8年まで、一部は具注暦記のみ）	原日記の広本（一部は略本）

図 日記の形態に関する見解の比較

えられる。それが、『親信卿記』『権記』に見られる統合作業である。蔵人経験者によって自身の日記が年月日順に編纂され、後世に伝わったことで、それこそが日記（古記録）の基本と認識されるようになったのである。その認識を決定的にしたのが、やはり蔵人頭を経験した藤原実資の『小右記』である。その検証については別稿に委ねるが、現存する『小右記』は、実資自らの責任で養子たちに作らせた統合版と結論付けられる。⁴⁵

「古記録文化」の確立は、現存する統合版の『小右記』が成立する摂関期の後期（後一条天皇朝）までを視野に入れて論じるべきであるが、形成は、生活・信仰と一体化した形で日記を付ける風習が定着したという意味

からも、摂関期中期に相当する藤原忠平とその子息たちの時代に位置付けられる。また、統合作業の形跡が『親信卿記』『権記』という二つの日記に認められることから、「古記録文化」は一条天皇朝に一つの方向性をもって展開し、やがて統合版の『小右記』の出現によって確立するという経緯も見えてきたと思われる。⁴⁶

その形式を現代の日本の文化と比較して説明するとすれば、十一月（一日の御曆奏）に配られるカレンダー形式の日記帳（行空きの具注暦）に加え、ルーズリーフ・ノート（別紙）を使って特定の儀式に関する記述をまとめていたことになる。しかも、そのルーズリーフ・ノートは一冊ではなく、少なくとも「年中行事」と「臨時」の二つがあり、それぞれのノートには、間仕切り（見出し）が付けられていたことも想像される。また、バインダーもなく紙継ぎが不十分であったことから、錯簡も起こったのであろう。このルーズリーフ・ノート（別記）は項目が定まっていって、それに基づいて（先例などを）検索するのは非常に便利であり、儀式書・部類記の作成に活用された可能性も高い。けれども、日記帳との照合に手間がかかったであろうし、新たな価値観に基づく検索が必要になるとかえって融通が利かないことがわかったのではないだろうか。そこで、保存・参照用として日記帳と統合した完全編年化（年月日順）の統合版を作る試みがなされたと考えられる。別稿では、それが統合版の『小右記』の出現によって完成の域に達したことの歴史的意義を、

未統合版のまま残された『左経記』と比較して論じたい。

註

- (1) 宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題^{（続歴史編）}』（養徳社、一九五一年）の部類記の総説において、記録は大別して日記と別記と部類記の三種に分かれ、日記は日記、別記は『九条殿遺誡』にいう「板要の公事」等の詳記、部類記は日記・別記その他の書から「抜要省繁」（『台記 康治元年十二月卅日条』）いて類別編集したものとされ、この解釈が以下の論考に踏襲されている。土田直鎮『奈良平安時代史研究』（吉川弘文館、一九九二年）第四部「古代史料論 記録」（初出は一九七六年）。橋本義彦『平安貴族社会の研究』（吉川弘文館、一九七六年）第四部「部類記について」（初出は一九七〇年）。山中裕『古記録と日記』（同編『古記録と日記』上（思文閣出版、一九九三年）所収、同『古記録と部類記——九暦・小右記を中心として』（『明月記研究』三、一九九八年、所収）「日記の部類記」（山中裕編『古記録と日記』下（思文閣出版、一九九三年）所収）。
- (2) 具注暦に記された日記を「暦記」とせずに「具注暦記」とするのは、『小右記』で藤原実資が自らの日記を指して用いる「暦記」が「別記」を含めている可能性があるからである。拙稿『小右記』と『左経記』の記載方法と保存形態——古記録文化の確立（倉本一宏編『日記・古記録の世界』（思文閣出版、二〇一四年）所収）参照。
- (3) 森公章『成尋と参天台五臺山記の研究』（吉川弘文館、二〇一三年）第三部第一章「遣外使節と求法・巡礼僧の日記」（初出は二〇一一年）。
- (4) 和田英松『国史国文之研究』（雄山閣、一九二六年）第一八「日記に就いて」（初出は一九一三年）、玉井幸助『日記文学概説』（目黒書店、一九四五年、後、国書刊行会より一九八二年に再版）。斎木一馬『古記録の研究』上

（斎木一馬著作集1、吉川弘文館、一九八九年）「日本古記録学の提唱 附 日記研究の主要論文目録」（初出は一九四七年）、「日記とその遺品」（初出は一九七九年）、同『古記録学概論』（吉川弘文館、一九九〇年）、木本好信『平安朝日記と逸文の研究——日記逸文にあらわれたる平安公卿の世界』（桜楓社、一九八七年）、西本昌弘『日本古代儀礼成立史の研究』（塙書房、一九九七年）第三編第三章「『冊命皇后式』所引の「内裏式」と近衛陣日記」（初出は一九九二年）。

(5) 橋本義彦前掲註（1）書第四部「外記日記と殿上日記」（初出は一九六五年）、木本好信前掲註（4）書第一章「『外記日記』について」（初出は一九八六年）。

(6) 『西宮記』前田家大永鈔本・恒例第二「相撲召仰」所引「貞信公記」承平三年七月廿四日条逸文に、相撲抜出の作法について「式部記」が引用されていることも注目される。

(7) 所功編『三代御記逸文集成』（国書刊行会、一九八二年）。なお、『政事要略』所引の阿衡事件に関する「宇多天皇御記」仁和四年十一月三日条について、これまで六月条の誤りと見なされることが多かったが、本条は十一月三日の日記として書き付けた回想（後悔の念）を含む記事とする、古藤真平「『政事要略』阿衡事所引の『宇多天皇御記』——その基礎的考察」（『日本研究』四十四、二〇一一年）の新見解が妥当だと考える。

(8) 拙著『平安時代の信仰と宗教儀礼』（続群書類従完成会、二〇〇〇年）第一篇第一章第一節三「天皇の神祇信仰と「臨時祭」——賀茂・石清水・平野臨時祭の成立」（初出は一九八六年）。

(9) 「造次可^レ張^{（座右）}、」という割注があり、おそらく「日中行事」について「僅かの間でも座右で広げて見るように」としたのである。『九条殿遺誡』の引用は群書類従本により、尊経閣文庫本（日本思想大系『古代政治社会思想』所収）との校異を（ ）で傍書した。

(10) 「日中行事」は「先」で始まり「次」「次」という形で毎日すべき事柄が

列記され、最後に「詩云、戟々慄々日慎一日、如臨深淵、如履薄氷、長久之謀能保『天年』」で結ばれる。

- (11) 引用部分は「凡成長頗知『物情』之時、朝読『書伝』、次拳『手跡』、其後許『諸遊戯』」という文で始まる「遺誠」第一条の最後にあたる。

- (12) 具注暦に日記的な記載を書き込む実例として『正倉院文書』（正集八・続修十四）の「天平十八年具注暦」（『大日本古文書』二所収）があるが、これを以て奈良時代以来の公日記がすべて具注暦に書かれていたと見ることは慎重を期さなければならない。『殿上日記』の付け方について、『侍中群要』（四・日記体）に「日下^{各注}書^{書し}支干^{書し}」とあり、日付の下または右に干支を書くことから、具注暦に書き込むものではなかったことがわかる。具注暦に日記を付ける習慣の普及・普遍化については、生活・信仰と一体になって形成された私日記の影響が強かったとも考えられ、具注暦に空白行が現れる時期と合わせて検討されるべきであろう。

- (13) 山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』（思文閣出版、一九八八年）第一篇第一章「藤原師輔の時代」（初出は一九七八年）。

- (14) 竹内理三『貴族政治の展開』（竹内理三著作集5、角川書店、一九九九年）第一章第四節「口伝と教命——公卿学系譜（秘事口伝成立以前）」（初出は一九四〇年）、黒板伸夫『撰関時代史論集』（吉川弘文館、一九八〇年）第二部「藤原忠平政権に対する一考察」（初出は一九六九年）。

- (15) 「抄」には単に「書き写す（謄写）」という意味もある。また、『貞信公記抄』という日記名が何時付けられたのかも不明であるが、『後二条師通記』寛治四年十二月八日条に「貞信公御記十卷暫下給由所申也」、「披見処巻数十二卷、加『目錄二卷』」とある。^{小野宮抄}とあるのは「目錄二卷」^{出云々}とある。ただし、この割注に「小野宮抄出」とあるのは「目錄二卷」をも指しており、その作成を「抄出」と表記しているとも考えられ、成立や形態について再検討が必要である。

- (16) 山本信吉『貞信公御記抄・九条殿御記』解題（天理図書館善本叢書、天理大学出版部、八木書店発売、一九八〇年）、桃裕行『古記録の研究（上）』

（桃裕行著作集4、思文閣出版、一九八八年）第二部「西宮記に引用された貞信公記抄について」（初出は一九七七年）、大日本古記録『貞信公記』解題（東京大学史料編纂所編、岩波書店、一九五六年）。

- (17) 山本信吉前掲註（16）解題。

- (18) 『貞信公記抄』天暦元年二月十七日条には「有^三如^三此之事、不^三記、私記、」とあり、内容不明であるが省略された記事があった。なお、忠平の仏事に関する別記については、この年から付けられたのか、また、別記と重複するので具注暦記の記載を省略したのか、それとも別記からの引用を省略したのか、実頼の「私記」を慎重に検討する必要がある。

- (19) 村井康彦『藤原時平と忠平』（歴史教育）十四上、一九六六年、黒板伸夫前掲註（14）論文。森田悌『平安時代政治史研究』（吉川弘文館、一九七八年）第二章第四章「撰関政治成立期の考察」（初出は一九七六年）、同「解休期律令政治社会史の研究」（国書刊行会、一九八二年）第一部第三章「藤原忠平政権の動向」（初出は一九七八年）。

- (20) 桃裕行前掲註（16）書第三部「北山抄」と『清慎公記』（初出は一九七四年）。『清慎公記』は「北山抄」に「私記」として引用され、それと「小右記」「洞院家廿巻部類」の記事から「叙位除目」「仏事」「違勅違式定事」「外記政」などの部が存在し、「中右記」に記された「私記六卷」（永久二年三月廿九日条）、「類聚記六卷」（元永二年七月廿五日条）、「部類記六卷」（同年八月廿二日条）にあたるとする。しかし、公任が「北山抄」の製作と緊密な関係のもとに『清慎公記』を切り貼りして部類記に仕立てたとの見解をとっている。

- (21) 『清慎公記』は中世に失われてしまいが、『通憲入道藏書目錄』に「清慎公記 一卷 安和」とあるのは安和年間（九六八―九七〇）の具注暦記を指すと考えられる。

- (22) 和田英松『皇室御撰解題』（『列聖全集』別巻、列聖全集編纂会、一九一七年）、同『皇室御撰之研究』（明治書院、一九三三年）、所功編『三

代御記逸文集成』（国書刊行会、一九八二年）Ⅵ「延喜天曆御記抄」の基礎的考察」（初出は一九八二年）。

(23) 『清涼記』については、『江次第抄』（巻第一・発題）に「村上天皇自製清涼記十巻」とあり、藤原忠通の『法性寺殿記』天永二年（一一一一）三月一日条に「清涼記者、天曆聖主令作始給之書也、以小一条大將濟時遣小一条大臣許、彼大臣感之加注文云々」とある。そして『撰集秘記』所引「清涼記」の傍注に「延喜七年九月十一日御記抄云」とあることから、「延喜御記抄」も天曆年間（九四七～九五七）初年に遡り得るという。所功前掲註（22）論文、同「平安朝儀式書成立史の研究」（国書刊行会、一九八五年）第四篇第三章「清涼記」の復原」（初出は一九八四年）。

(24) 山中裕前掲註（13）書第一篇第四章「九曆」と「九条年中行事」（初出は一九五七年）、同前掲註（1）「古記録と部類記——九曆・小右記を中心として」。栗木睦「九曆抄」「九条殿記部類」成立考——編者藤原行成説の提唱（『古文書研究』五十四、二〇〇一年）。山中裕の諸論文では「九曆殿記」を「九曆別記」と言い換えていることもあるように「別記」としながらも、「九条年中行事」の完成を一つの目標として作られた部類記の一部であるとしている。栗木睦論文では、『九条殿御記』を「九条殿記部類」と言い換え、山中裕の研究に見られる解釈の変更をまとめた上で「九条年中行事」作成のためという見解を否定しているが、部類記であるとの見方は変更せず、その編者を藤原行成としている。根拠として院政期の藤原宗忠の例を提示するが、それを撰関期にあてはめることには問題があり、従来から問題にされていた伊尹を「伊々」「伊」と避字している点も成立時に限らず書写段階でも起こり得ることであり、より緻密に「九曆抄」との関係を考えるべきである。

(25) 大日本古記録「九曆」解題（東京大学史料編纂所編、岩波書店、一九五八年）。山本信吉前掲註（16）解題。

(26) 橋本義彦前掲註（1）書第四部「九条殿記の逸文」（初出は一九七〇年）、

平林盛得「九条殿記（資料紹介）」（『書陵部紀要』二十九、一九七八年）、三輪仁美「宮内庁書陵部所蔵『九条殿記』第二巻の検討」（『古文書研究』七十六、二〇一三年）。

(27) 「九条殿御記」第三巻「灌仏」承平六年四月八日条に「具由記年中行事」とあるが、「灌仏」という項目は巻頭の目次になく、本条は前の「擬階奏」同月七日条に続けて（具注曆記ないしは「九曆記」貞信公教命）から誤って挿入され、この「年中行事」も「九条年中行事」ではなく別記の「年中行事」と見なされる。

(28) 「中右記」元永二年（一一一九）八月廿二日条に「九条殿部類^{十四}」とある。かかる視点による「九曆」の別記の復元は、山中裕前掲註（24）論文で試みられている他の逸文や「九曆記」貞信公教命「九条年中行事」の記載と詳細な比較をするだけでなく、「権記」「小右記」などの別記の項目立てを検証して、撰関期における「知の体系」の中に位置付けることで可能となるであろう。

(29) 山下克明「平安時代の宗教文化と陰陽道」（岩田書院、一九九六年）第二部第三章「貞信公記」と曆」（初出は一九八四年）。

(30) 「九曆」の逸文として最も古い延長八年八月十七日条（『仁和寺記録』「十八・真俗雜聞集」所収）は回想録的なものであり、その次に古いのは蔵人頭になった直後の承平元年閏五月廿七・廿九日条の臨時御読経記事（『西宮記』（前田家大永鈔本・恒例二・内膳司供忌火御飯、恒例三・季御読経）・『同』（前田家本・巻四・裏書）所収）である。

(31) 最古写本の陽明文庫本は、四巻揃いで「平記」の一部として書写されている。陽明叢書一七記録文書篇第六輯「平記・大府記・永昌記・愚昧記」（思文閣出版、一九八八年）所収。以外の写本は「天祿三年記」「天延元年記」「天延元年・同二年記」「天延二年記」の四種に分けられている。渡辺直彦「日本古代官位制度の基礎的研究 増訂版」（吉川弘文館、一九七八年）第五篇第五章第三節「蔵人方行事」と「親信卿記」（初出は一九七八年）。山本信吉

- 『撰関政治史論考』（吉川弘文館、二〇〇三年）第五部第二章「『親信卿記』の研究」（初出は一九六九年）、松蘭斎「日記の家——中世国家の記録組織」（吉川弘文館、一九九七年）第一部第四章「藤原宗忠の家記形成」（初出は一九八九年）、柴田博子「『親信卿記』と平親信」（佐藤宗諱先生退官記念論文集刊行会編『親信卿記』の研究（思文閣出版、二〇〇五年）所収）。
- (32) 山本信吉前掲註(31)論文。柴田博子前掲註(31)論文でも「現存の『親信卿記』がいくつかの部類記事からの復原本である」とする山本信吉説が補強されている。なお、『親信卿記』の条文については、便宜のために『親信卿記』の研究の番号を()で示す。
- (33) 本条（天禄三年十月十六日条）の日付に頭書して「此事又有」下如何、とあるのは、後述するように首書標目を書き入れた段階で別記の次に具注暦記の記載を付けたことがわからなくなっていたことを意味する。
- (34) 『小右記』『左経記』など撰関期の諸日記に付けられた首書標目についての考察は、拙稿前掲註(2)論文参照。
- (35) 倉本一宏『藤原行成「権記」全現代語訳』下（講談社学術文庫、二〇一二年）「おわりに」。
- (36) 高田義人「御目録」「奏書目録」について——平安時代における天皇決裁の記録」（『国史学』一五八、一九九五年）、同「宣旨目録と奏書目録——平安時代の文書伝達と「目録」型記録」（『書陵部紀要』四十八、一九九七年）。「権記」長徳三年七月廿六日条、長保元年十一月十四日・十二月十八日条、同二年七月廿八日・八月十九日・廿四日・廿九日・九月十三日・廿三日・十二月廿九日条、同三年正月十九日・三月四日条、寛弘元年五月七日条、同四年二月九日・十月廿九日条、同七年八月十一日条、同八年三月十一日条など参照。なお、寛弘五年十一月十三日条に「延喜御記抄目録」を道長に返却したという記事があり、これとの関連が問われる。
- (37) 『権記』寛弘元年四月廿七日条の南所申文に「次第具在（別記）」とあるほか、同三年八月十一日条の定考、同四年十一月八日条の春日祭使、同五年正月廿五日条の左大臣藤原道長大饗、同七年十一月十日条の為平親王薨奏、同年十二月十日条の御体御卜などの記述が「別記」によると注記されている。
- (38) 『権記』寛弘元年四月廿八日条の「定旨在別」は目録を指し、同年八月十一日条に「子細在別」、同五年五月廿六日条に「記在別」、同六年八月十四日条に「子細注別」とあるのは別記を指すか。別記に「凶事」の項目があったことは後述する。
- (39) 「裏書」と記されたものに、長保五年四月廿一日条（道長賀茂詣の競馬、寛弘二年七月十日条（道長、施米文を奏す。史料纂集本『権記』三の口絵）、九月廿九日条（夢）、同三年二月三日条（地震奏に関する諸書からの注記）、同四年二月廿八・廿九日条（道長春日詣）、同六年三月四日条（任官の人々）、同八年七月九日条（一条天皇葬送行障持者）、十月十六日条（内記不足）、十一月九日条（夢）などがある。寛弘七年正月十六日条・同八年十月十六日条などに頭書・頭注があり、これについても検討を要する。また、同七年六月四日条は、先日（三月廿日）東宮居貞親王に続紙を献上した際に雑事を仰せつけられたという短い文に続けて、「別紙云、」として「寛弘七年六月四日」という日付に始まる詳しい記事を載せている（史料纂集本『権記』三の口絵）。
- (40) 尾上陽介「『民経記』と暦記・日次記」（五味文彦編『日記に中世を読む』（吉川弘文館、一九九八年）所収）、同「中世の日記の世界」（日本史リブレット30、山川出版社、二〇〇三年）、同「『民経記』（藤原経光）——「稽古」に精進する若き実務官僚」（元木泰雄・松蘭斎編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）所収）。
- (41) 『冊命皇后式』（京都御所東山御文庫記録乙二十八所収）と『立后雑事抄』（柳原家記録十一所収）に『権記』の彰子立后関係記事がある。『大日本史料』第二篇之三では長保二年二月二十五日条に収録した『権記』の記事について『冊命皇后式』所収逸文を用いて補正し、倉本一宏『藤原行成「権記」

全現代語訳』上（講談社学術文庫、二〇一一年）では現代語訳に反映して

になる。

いる。拙稿「撰関期の立后関係記事——『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて」（『明星大学研究紀要——人文学部——日本文化学科』二十、二〇一二年）では【事例3】に彰子立后関係記事を史料纂集本に基づいて書き下し文にし、主な異同箇所を指摘した。

- (42) 以下に指摘する異同箇所については、『冊命皇后式』を用いて補正した『大日本史料』第二篇之三と伏見宮本を底本とした史料纂集本『権記』一の頁・行を（大）〇頁〇行／『纂』〇頁〇行）で示す。

- (43) 『冊命皇后式』には「所_レ知食_一也、」の後に割注で「以上註也、」とある。

- (44) 木本好信『平安朝官人と記録の研究——日記逸文にあらわれたる平安公卿の世界』（おうふう、二〇〇〇年）第二章七「『院号定部類記』——上東門院彰子の出家と道長」（初出は一九八一年）。

- (45) 拙稿前掲註（2）論文。

- (46) なお、先に『権記』の記載を検討して『村上天皇御記』について部類形式の別記があった可能性と藤原行成の「土代」の作成（寛弘元年三月二日条）を指摘したが、目録の記事とも推測される『権記』長徳四年七月十三日条に「延喜・天曆御記欠卷甚多、必尋_二在所_一可_レ被_二書写_一事、」とあり、長保二年七月十三日条に「下_二給応和元年秋冬御記_一、仰云、還宮間雜事抄出可_レ進、」とあることから、一条天皇の命によることは明らかである。そして、寛弘七年閏二月八日条に「参内、康保三年秋御記書出献_レ之、」とある『村上天皇御記』康保三年秋分に始まり、同月十六日に「康保三年夏御記」、廿六日に「康保三年冬御記」、三月一日に「康保二年春御記」、二日に「同年夏御記」、五月廿五日に「天曆八年御記二卷・康保二年冬一巻」、六月五日に「天曆八年冬巻」、十九日に「村上御記天曆四年夏巻」と年次別の『御記』が書写・奏覧されており、これが具注暦記と部類形式の別記の統合版であったとも考えられる。そうだとすれば、日記の統合版の作成は一条天皇の意向に沿ったもので、「古記録文化」の展開が決定的だったということ